

このくにのかたちを考える 目次

はじめに

第1章 このくにのはじまりを考える

大嘗祭の本義とは／飛鳥の意味／天武天皇がつくられたこのくにのはじまり／『日本書紀』は誰が作ったのか／日本という国名／天皇という呼び名／『古事記』の世界

第2章 このくにのかたちを考える

このくにのあの世／このくにのかみはおほぜい／このくにのほとけさま／このくにのかみさまとほとけさま／江戸の思想（儒・仏・神の格闘）／近代の思想（江戸から明治へ）／近代の思想（西洋思想との出会い）／近代の思想（ナショナリズム）／このくにのころのかたちとくにのかたち／あいまいなこのくにのこころのかたち

【対談】 佐々木閑氏「仏教とは、何か。」

83

35

13

教育の意味を考える／どのようなひとを育むのか／「学ぶ力」を育む／「生きる力」を育む
／このくにの教育の歴史／江戸時代の教育／このくにの教育の歴史／明治期の教育／
このくにの教育の歴史／戦後の教育／教育行政と一般地方行政／こころと身体を育む
／学ぶ力、考える力、探究する力を育む／働く意欲と働く力を育む／地域で協働して活躍す
る人を育む／地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる

第4章 このくにのグローバル化時代を生き抜くかたちを考える

このくにのグローバル勢力との出会い／グローバリゼーションの起源／もう一つのグローバ
リゼーション／中国とアメリカの資本主義／このくにの資本主義のこれまでとこれから／新
しいグローバル化時代を生き抜くには／これから雇用システムのかたち／これから社会
保障システムのかたち／これから社会福祉のかたち／社会保障分野における地方の役割

第5章 このくにの国土づくりのかたちを考える

日本の鉄道は狭軌に（エドモンド・モレル）／鉄道敷設は東海道線からに変更（井上勝）／国
土計画における内務省と鉄道院のしのぎあい（十河信二、種田虎雄、太田圓三）／国土形成
計画は技術的・論理的に（宮本武之輔、兼岩伝一）／日本列島改造論と田園都市国家構想
（田中角栄、大平正芳）／国土利用計画諸法制の誕生（下河辺淳）／国土形成の課題（計画

の論理性／／国土形成の課題／＼計画のデザイン力／＼国土形成の課題／＼計画の実行性／＼
／＼人口減少下のこのくにのまちづくりのかたちは／国土の大きな部分を占める農地の在り方
／＼国土の大きな部分を占める森林の在り方／＼このくにの骨格となる交通体系

【座談会】「食文化への探求 奈良県からの挑戦」

林 芳正（衆議院議員）
西井孝明（味の素㈱社長）

第6章 このくにの外交のかたちを考える

石上神宮の「七支刀」の意味／倭の五王の中国大陆との外交／遣隋使の時代／遣唐使の時代
／東アジアの中国中心の外交のかたち／東アジア近代の外交のかたち／＼中国的開国／＼近
代の外交のかたち／＼どうしてアメリカと戦争をしたのか／＼近代の外交のかたち／＼うち
とそと／＼外交のソフトパワー／＼心理と情報／＼外交のソフトパワー／＼警察の役割／＼
外交のソフトパワー／＼地方の役割／＼

【対談】小倉紀蔵氏「韓国と日本、分かり合える関係を築くために」

第7章 このくにのものを決めるかたちを考える

危機管理とは／＼戦争という危機管理／決める人と実行する人／異なる意見の伝え方／異なる
意見の人々との共生／民主主義でものを決める／民主主義における代表

第8章 このくにの統べるかたちを考える

超越神不在のこのくに／このくにの権力の正統性の根拠／このくにの正統性の中心におられた天皇／政治の正しさとは／政治の改革をどのように行うか／このくにの統べるかたちの課題は／このくにの統べるかたちをどのように良くするか

【対談】 佐藤優氏「情報と国際協調が、日本の安全を守る新たな力に」

第9章 このくにの地方自治のかたちを考える

地方自治の「発生」／農民自治（土地の管理と収穫物の管理）／農村自治（村落自治）／農村から町村へ／未完の地方自治／グローバル化時代の地方自治のかたち／地方政治（住民自治の現場）／地方行政組織のかたち／奈良モデルの実験

あとがき

はじめに

はじめに

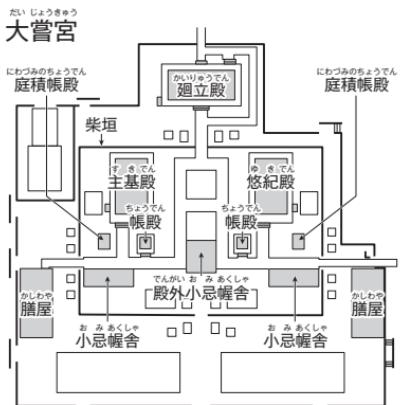
令和元（2019）年11月14日、午後6時前、大量のバスが宮中豈明殿の玄関先を出発しました。薄暗闇の皇居内を移動する途中、右手側に丸の内や大手町の高層ビルの窓が明々と輝いているのが見えましたので、バスは北へ向かっているようです。

バスに乗ったわれわれは、皇位繼承儀礼の中に組み込まれた重要な儀式「大嘗祭」の参列者です。しばらく走行したバスは、薄暗闇の中、松明の篝火が照らす幕舎（テント）の前に停車しました。

大嘗祭が行われる大嘗宮に到着したのです。われわれは、バスを降りて、そのテントに入り、テント内の土間に並べられた折りたたみ椅子にそれぞれ着席し、暗

闇の中、時が過ぎるのを待ちました。

幕舎の前の薄暗闇の中にかすかに見えるのは、木でこしらえた舞台のようなものでした。しばらくすると、何人もの人が舞台に上がり着座されていました。儀式で歌を奏する人々のようです。大嘗宮には、舞台の奥に悠紀殿と主基殿と呼ばれる同じ形の儀式の場があるようです。



さらにしばらくして、天皇陛下がお成りになり、その際にアナウンスがありましたので、全員起立して低頭いたしました。陛下は悠紀殿にお越しになられたようですが、そのお

姿はよく見えません。悠紀殿ではその日のうちに、主基殿では次の日の夜明け前に、陛下が食を召し上がる所とされています。

暗闇の中、声が聞こえ始めます。「古風」という歌が歌われ始めたのです。第15代応神天皇時代の歌です。『日本書紀』卷第十に、応神天皇が吉野宮に行幸された時に、地元の民である国棟（現・国栖）の人々が、時の天皇に奉つたとされている歌です。

「かしのふ」

「よくす」

「きこ」
「も」
「きこ」
「まろ」
「が」
「父」

「きこ」
「も」
「きこ」
「まろ」
「が」
「父」

「きこ」
「も」
「きこ」
「まろ」
「が」
「父」

國栖の里は、奈良県吉野町の少し奥深いところに今もあり、240人位の人々が住んでいる鄙びた村落です。『日本書紀』には、歌が訖ると、里の人々は「口を打ちて、仰ぎて咲ふ」と記されています。天皇が里村へ行き、村人が造った酒を天皇に勧め、一緒に笑つたという、何どものどかな第15代天皇の時に歌われた歌が、第126代天皇の即位の儀礼の中で歌われているのです。

大嘗祭が即位の儀礼として執り行われるようになつたのは、第40代天武天皇の時からだと言われています。『日本書紀』卷第二十九に、即位の年12月に、「おほにへつかまつ」とあります（坂本太郎他『日本書紀五』岩波文庫）。大嘗祭の原型である新嘗祭は、毎年、旧暦11月の冬至のころに、五穀豊穣に感謝・祈願する宮中祭祀として行われてきました。天武天皇時代にも、今の令和の時代にも、大嘗祭は暗闇の中で行われます（伊勢神宮の遷宮や春日大社の造替の儀式も暗闇の中で行われます）。このくに連綿と続く暗闇の中の即位の儀式と、近代化されたこのくにの丸の内や大手町の高層ビルの明るさとは非常に対照的で印象的なものでした。

歌われる場所は、鄙びた里山と高層ビルに囲まれた都会の宮殿の一隅という違いはありますが、1700年の時を経て同じ歌が歌われるという、歴史の一貫した流れが残っている「このくに」は、ど

ういう「くに」なのでしょうか。

新型コロナウイルスや自然災害に襲われ、近隣の国々とのお付き合いにも悩みが多い昨今において、このくにのかたちがつくられてきた来し方を振り返り、これからこのくにの往く末を考えることは、今このくにに生きている者にとって、とても大事なことには間違ひありません。

どうして奈良県知事がそのような事を考えるのか、と思われる向きもおられるかもしれません。

奈良は、このくにが始まった地です。奈良の地に立つて四方を見渡し、歩き回つて古を偲べば、今もこのくにに息づいている色々なかたちの「もと」が見つけられます。そのような場所では、このくにの来し方・行く末を考えるきっかけはいつも与えられています。

加えて、現在、わが国が向き合っているグローバル世界は、1300年から1400年の昔、大和の地に住んでいた当時の為政者達が格闘した、中国を中心としたグローバル世界を思い出させます。

当時の圧倒的なグローバルセンターであった隋・唐をはじめとする中国大陸の政権と向き合つた先人達の苦労や努力を、奈良の地で今もう一度ひも解いて見つめ直せば、何か新しい意味のある知恵を授かるかもしれません。

さらに、令和の大嘗祭の翌年、2020年は、「日本書紀」が呈上され、また、このくにのかたちをつくる中心人物であつた藤原不比等が亡くなられて、1300年となる節目の年でした。さらに、2022年は当時の大国「隋」と交渉された推古天皇の摂政・聖徳太子が亡くなられて、1400年目になります。

私の部屋の執務机の正面には、藤原不比等が神山と仰ぎ、その麓で当時の政権の高官が遣唐使の安全渡航の祈願をした御蓋山^{みかさやま}が見えます。今でも、藤原不比等に時折見られ、このくにのことをもつと考えるように促されているような気さえします。

はじめに

このような、奈良の地の力といしさか勝手な思い込みの気持ちに押されて、「このくにのかたち」について、考へてきたことを文字にすることにいたしました。なお、「このくにのかたちを考える」という言葉は、10年も前に当時三重県知事でおられた野呂昭彦さんがおっしゃっていたものです。もとより、浅はかな知識しかありませんが、このくにのかたちを考える必要があると思われる方々に、何らかの参考になるアイディアを提供することになれば幸いと思い、書き始めようと思ひます。

【参考文献】

坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋・校注『日本書紀』岩波文庫（1994～1995年）